

●研究ノート(査読を経たもの)

人びとの価値観の諸相と変化の軌跡 ——「寛容性」に焦点を当てて

一寸木英多良

目次

- I. はじめに
- II. 人びとの価値観の諸相と変化の軌跡
- III. 各国・地域における人びとの価値観
- IV. 各国・地域における実証研究から得られた示唆
- V. おわりに

キーワード

寛容性 (tolerance)
自己表出的価値観 (self-expression values)
脱物質主義的価値観 (post-materialist values)

The Aspects of Human Values and Their Trajectories of Change:
A Review Focusing on “Tolerance”

by HIDETARO CHOKKI

I. はじめに

1. 本研究の目的

これまで、政治文化 (political culture) に関する実証的研究 (Almond and Verba (1963) など) において、民主主義的な政治文化と深く関係している要素のひとつとして、「自分の立場と異なる人びとに対する寛容な態度」が挙げられてきた (Finkel et al. 1999)。グローバリゼーションが急速に進展する現代社会において、今後の民主主義的な政治文化を考える上で、「寛容性 (tolerance)」はきわめて重要なテーマのひとつである。

政治文化に関する研究は、Almond and Verba (1963) などの研究のあと、1960 年代から一時批判を受けた時期があったが、1980 年代以降、「ヨーロッパ価値観調査 (European Values Studies, 以下 EVS)」の研究グループ、そしてミシガン大学の Inglehart の研究グループにより、大規模な国際比較調査に基づく実証的研究が進められてきた¹⁾ (真鍋 1999)。

しかしながら、「寛容性」に焦点を当てて、これまでの Inglehart らによる研究を体系的に整理する作業はまだほとんどなされていない。そこで、本研究では、「寛容性」を含む人びとの価値観の諸相と変化の軌跡 (trajectory) という観点から、これまでの Inglehart らの研究をレビューすることとした。

このような試みにより、今後の「寛容性」に関する研究の進展に資することを目指したい。

2. 本研究の手順

(1) Inglehart の研究については、WVS の公式ウェブサイト (<http://www.worldvaluessurvey>).

1) EVS はヨーロッパの 10 カ国・地域を対象に 1981 年に第 1 回調査が実施され、その後 1990 年、1999 年、2008 年に調査が実施された。一方、ミシガン大学の Inglehart は、EVS の 1990 年調査をヨーロッパ以外の国・地域でも反復実施 (replicate) することにより、「世界価値観調査 (World Values Survey, 以下 WVS)」の第 1 回調査を実施した。その後 WVS は 1995 年、2000 年、2005 年、2010 年に実施された。

org/new_index_publications）に数多くの文献が紹介されているが、本稿では以下の文献をレビューの対象とすることとした。

Inglehart, R (2000), "Culture and Democracy", in L. Harrison and S. Huntington eds., *Culture Matters: How Values Shape Human Progress* (New York: Basic Books), 80-97

(2) 「ヨーロッパ価値観調査」の研究グループの研究については、以下の手順により本稿でレビューの対象とする文献を選定した。

① *European Values Studies* と題されたシリーズのうち、以下の2冊に収録された文献の中から対象を選ぶこととした。

- ・ P. Ester, L. Halman and R. Moor eds. (1994), *The Individualizing Society* (Tilburg University Press)
- ・ T. Pettersson, Y. Esmer eds. (2008), *Changing Values, Persisting Cultures* (Brill)

② 上記2冊の巻末の索引を使って、'tolerance' という言葉を使用している文献を確認したところ、*The Individualizing Society* では2つの文献が該当した。また、*Changing Values, Persisting Cultures* では3つの文献が該当した。

③ 以上の手順を経て、本稿では、以下の5つの文献を取り上げることとした。

- ・ Broek, A and Heunks, F (1994), 'Political Culture Patterns of Political Orientations and Behaviour'
- ・ Broek, A and Moor, R (1994), 'Eastern Europe after 1989'
- ・ Auh, S (2008), 'Value Change and Democratization in South Korea'
- ・ Carballo, M (2008), 'Cultural Trends in Argentina: 1983-2000'
- ・ Esmer, Y (2008), 'Islam, Gender, Democracy and Values: The Case of Turkey, 1990-2001'

Ⅱ. 人びとの価値観の諸相と変化の軌跡

Inglehart (2000) による、WVS と EVS の結果 (findings) に基づく、人びとの価値観の諸相と、価値観の変化の軌跡についての論考は、以下のようにまとめられる。

1. 人びとの価値観の諸相

人びとの価値観には、以下の2つの次元(dimensions)が存在することが確認された。

(1) 「伝統的価値観 対 世俗＝合理的価値観」の次元

1つは「伝統的価値観 対 世俗＝合理的価値観」の次元である。

ここで「伝統的価値観 (traditional values)」とは、「宗教の重視」「絶対的な規範の重視」「伝統的な家族観の重視 (大家族を好み、離婚を拒否)」「中絶、安楽死、自殺の拒否」「社会における協調の重視」「対立よりコンセンサスの重視」「権威への服従」「国家への高い誇り」などの一連の価値観をいう。

これに対して、「世俗＝合理的価値観 (secular-rational values)」とは、上記の「伝統的価値観」とは反対の価値観をいう。

(2) 「生存価値観 対 自己表出的価値観」の次元

2つ目は「生存価値観 対 自己表出的価値観」の次元である。

ここで「生存価値観 (survival values)」とは、「物質主義的価値観 (materialist values)」「低い主観的ウェルビーイング (low subjective well-being)」「男女の平等に対する低い支持」「科学技術に対する高い信頼」「環境運動に対する低い支持」「権威的な政府への支持」「外集団への不寛容 (intolerance towards outgroups)」「他者に対する低い信頼 (low interpersonal trust)」などの価値観をいう。

これに対して、「自己表出的価値観 (self-expression values)」とは、「脱物質主義的価値観 (post-materialist values)」「高い主観的ウェルビーイングの強調」「生活の質の強調 (emphasis on quality of life)」「女性運動への支持」「環境保護の強調」「寛容性」「他者に対する高い信頼」「制度／機関／団体に対する低い信頼 (low trust in institutions)」「決定への参加の要求 (demand for participation in decision making)」などの価値観をいう。

2. 人びとの価値観の変化の軌跡

(1) 経済発展にともなう人びとの価値観の変化

WVS と EVS の結果から、経済発展にともない、「絶対的な規範の重視」が減退し、「合理性」「寛容性」「他者への信頼」などを重視する価値観へのシフトが起きていることが確認された。特に先進諸国では、「生存の欲求の充足」が当然のこととみなされる時代に育った世代に、「生存価値観」から「自己表出的価値観」

へのシフトが起こっている。

この結果から、経済発展は、人びとの価値観を、その社会の文化的・宗教的・歴史的伝統にかかわらず、共通の方向に導くと考えられる。

（2）文化的・宗教的・歴史的伝統の人びとの価値観へのインパクト

一方、「プロテスタント諸国」「カトリック諸国」「英語圏諸国（English-speaking zone）」「ラテンアメリカ諸国」「儒教諸国」「東方正教会諸国」「旧共産圏諸国」「アフリカ諸国」などの、明確で一貫した国・地域のクラスターが存在することが確認された。これは、実際の地理的な距離にかかわらず、各クラスターの中の人びとは、比較的類似した価値観を有していることを示している。

この結果から、それぞれの社会の「宗教的な伝統（religious traditions）」「文化的な伝統（cultural heritage）」「歴史的な伝統（historical heritage）」が、人びとの価値観に永続的なインパクトを与えているものと考えられる。

3. 検討課題

Inglehart（2000）の WVS と EVS の結果に基づく知見は、以上のようにまとめられる。

本稿のⅢ．以下では、Inglehart の2つの次元で人びとの価値観をとらえるアイデアは、それぞれ経済発展のレベル、文化的な伝統などが異なる個々の国では、はたしてどの程度適用可能であるかをみていきたい。

そこで、次に5つの国・地域に関する実証的研究をレビューし、個々の国・地域における人びとの「寛容性」を含む価値観の諸相、価値観の変化の軌跡を整理することとしたい。

Ⅲ．各国・地域における人びとの価値観

1. 西欧諸国

Broek and Heunks（1994）による、EVS（1981年、1990年実施）の結果に基づく、西欧13ヵ国・地域²⁾の人びとの価値観の諸相と、変化の軌跡についての調査結果の読

2) ノルウェー、アイスランド、スウェーデン、西ドイツ、フランス、デンマーク、イギリス、イタリア、ベルギー、オランダ、スペイン、アイルランド、北アイルランド

み取りは、以下のようにまとめられる。

(1) 「脱物質主義的価値観」

「今後 10 年間に最も重要な国家の目標」に関する質問項目—「秩序の維持」「人びとが政府の重要な決定に発言できる機会を増やすこと」「物価の上昇に対処すること」「発言の自由を守ること」—から作成された「物質主義的／脱物質主義的価値観」の測度 (measure) の平均値 (mean scores) を、国ごとに 1981 年と 1990 年で比較した。その結果、13 カ国中 11 カ国で「脱物質主義的価値観」の上昇が確認された。

このような「脱物質主義的価値観」の上昇は、西欧諸国における 1950 年代以降の高いレベルの「生存の安全 (security)」により醸成されたものである。

また、この「脱物質主義的価値観」の上昇は、年齢が高い世代から若い世代への入れ替わり (cohort replacement) に関連していることが確認された³⁾。

(2) その他の「自己表出的価値観」

① 「寛容性」

「隣人にしたくない人びと (various group of people that you would not like to have as neighbors)」に関する質問項目から作成された「エスニック集団 (ethnic groups)」「逸脱した行動をとる集団 (deviant behavior)」「政治的に過激な立場の集団 (extremists)」の測度の平均値を、国ごとに 1981 年と 1990 年で比較した。その結果、「エスニック集団」については 13 カ国中 8 カ国で、「逸脱した行動をとる集団」については同 12 カ国で、「政治的に過激な立場の集団」については同 12 カ国で「寛容性」の低下が確認された。

② 「制度／機関／団体に対する低い信頼」

「制度／機関／団体に対する信頼」に関する質問項目から作成された「民主的な機関 (democratic institutions)」⁴⁾「権威的な機関 (authoritative institutions)」⁵⁾の測度の

3) 1981 年の調査、1990 年の調査において、各世代の数値は次のとおり。18 歳～26 歳 (2.42, 2.77), 27 歳～35 歳 (2.34, 2.70), 36 歳～44 歳 (2.20, 2.59), 45 歳～53 歳 (2.04, 2.44), 54 歳～62 歳 (1.98, 2.28), 63 歳～71 歳 (1.88, 2.17), 72 歳以上 (1.84, 2.01)

4) 「労働組合」「報道機関」「議会」「司法機関」

5) 「教会」「軍」「警察」

平均値を、国ごとに1981年と1990年で比較した。その結果、「民主的な機関」については13カ国中10カ国で、「権威的な機関」についてはすべての国で信頼の低下が確認された。

③ 「政治への積極的な関与」

「政治への参加」に関する質問項目から作成された「従来型の参加 (conventional participation)」⁶⁾「非従来型の参加 (unconventional participation)」⁷⁾「反抗的な参加 (disobedient participation)」⁸⁾の測度 (パーセンテージ) を、国ごとに1981年と1990年で比較した。その結果、全体として「参加した」と答えた回答者の割合の上昇が確認された。特に、「非従来型の参加」は、スペイン以外の12カ国で顕著な上昇が見られた。

2. 韓国

Auh (2008) による、WVS (1990年, 1996年, 2001年実施) の結果に基づく、韓国の人びとの価値観の諸相と、変化の軌跡についての調査結果の読み取りは、以下のようによまとめられる。

(1) 「脱物質主義的価値観」

「今後10年間に最も重要な国家の目標」に関する質問項目—6項目が「物質主義的価値観」⁹⁾、その他の6項目が「脱物質主義的価値観」¹⁰⁾に関する項目—のうち、5項目以上の「脱物質主義的価値観」に関する項目を選択した回答者 (以下「脱物質主義者」) の比率は、1990年 (4.6%) から1996年 (4.9%) かけてわずかに上昇した。また、1990年代末の経済危機を経た後の2001年 (4.5%) にはわずかな減少が見られた。これに対し、5項目以上の「物質主義的価値観」に関する項目を選択した回答者 (以下「物質主義者」) の比率は、1990年 (31.3%) から2001年 (23.4%)

6) 「政治について議論すること」「政党の党員になること」

7) 「嘆願書の署名すること」「合法的なデモに参加すること」「ボイコットに加わること」

8) 「ストライキに加わること」「建物や工場を占拠すること」

9) 「高い経済成長」「強い国防力の保持」「秩序の維持」「物価上昇に対処すること」「安定した経済」「犯罪の撲滅」

10) 「人びとが職場とコミュニティにおける決定に発言できる機会を増やすこと」「都市と地方をもっと美しくすること」「人びとが政府の重要な決定に発言できる機会を増やすこと」「発言の自由を守ること」「もっと人間的な社会にすること」「アイデアが金よりも重視される社会にすること」

かけて調査の回ごとに減少した。

このような韓国の人びとの「物質主義的／脱物質主義的価値観」の推移は、「漢江の奇跡」と呼ばれる同国の急速な経済発展と関連している。

また、西欧諸国と同様に、韓国においても「脱物質主義的価値観」は若い世代で高く、「脱物質主義的価値観」の推移は、年齢の高い世代から若い世代への世代の入れ替わり（generational replacement）と関連している。

（２）その他の「自己表出的価値観」

①「寛容性」

「隣人にしたくない人びと」に関する質問項目—「麻薬中毒者」「アルコール中毒者」「犯罪歴のある人びと」「精神的に不安定な人びと」「外国人労働者」—から作成された「寛容性」の測度を、1990年、1996年、2001年で比較した。

その結果、「脱物質主義者」については、高い数値が確認され、それは調査の回ごとに上昇した（1990年：38、1996年：49、2001年：66）。

これに対し、「物質主義者」については、低い数値が確認され、それは1990年と2001年で差が見られなかった（1990年：－23、1996年：－7、2001年：－23）。

②「制度／機関／団体に対する低い信頼」

「制度／機関／団体に対する信頼」に関する質問項目—「政府」「議会」「司法機関」「警察」「軍」—から作成された「制度／機関／団体に対する信頼」の測度を、1990年、1996年、2001年で比較した。

その結果、「脱物質主義者」については、3回の調査を通じて低い数値が確認された（1990年：－90、1996年：－36、2001年：－69）。

これに対し、「物質主義者」については、3回の調査を通じて高い数値が確認された（1990年：24、1996年：20、2001年：33）。

③「政治への積極的関与」

「政治への参加」に関する質問項目から作成された「政治への参加」の測度を、1990年、1996年、2001年で比較した。

その結果、「脱物質主義者」については、3回の調査を通じて高い数値が確認されたが、それは調査の回ごとに減少した（1990年：101、1996年：65、2001年：45）。

これに対し、「物質主義者」については、3回の調査を通じて低い数値が確認さ

れた（1990年：－27，1996年：－31，2001年：－34）。

3. アルゼンチン

Carballo (2008) による、WVS（1984年，1991年，1999年，2002年実施）の結果に基づく，アルゼンチンの人びとの価値観の諸相と，変化の軌跡についての調査結果の読み取りは，以下のようにまとめられる。

（1）「脱物質主義的価値観」

アルゼンチンでは，1999年の時点まで，収入の水準，教育の水準が高い層に主導される形で，「脱物質主義的価値観」が上昇する傾向にあった。一方，その後1999年から2002年にかけては，人びとの価値観は「物質主義的価値観」の方向に変化した。

このようなアルゼンチンの人びとの「脱物質主義的価値観」の変化は，1983年から1999年にかけて，同国の歴史で初めて民主主義的な統治が長期間続き，経済的にも安定していたことと関連している。しかし，1999年から2002年にかけての経済，政治の混乱が，人びとの価値観が「物質主義的価値観」の方向に変わることに影響を及ぼした。

（2）その他の「自己表出的価値観」

アルゼンチンでは，各時期の社会の特徴を反映し，価値観の変化は複雑な傾向を示すものとなった。

①「寛容性」

アルゼンチンの人びとは，以下のとおり，「他者に対する信頼度」が極めて低いにもかかわらず，全体として寛容であり，国籍（nationality），人種（race），宗教に関し差別的な態度を示さなかった¹¹⁾。

②「他者に対する信頼」

1999年の調査では，「ほとんどの人びとは信用できるか？（Generally speaking,

11) 本文には記載がないため，筆者がWVSのデータを確認した結果，「隣人にしたくない人びと」という質問項目のうち，「異なる人種の人びと」を挙げた回答者は，1991年は2.7%，1999年は4.7%，2002年は2%，「犯罪歴のある人びと」を挙げた回答者は，1991年は41.4%，1999年は43.4%であった。

would you say that most people can be trusted or that you need to be very careful in dealing with people ?)」という質問項目に関し、回答者の85%が「非常に気をつける必要がある」と回答している¹²⁾。

このように「他者に対する信頼」が低い一方、アルゼンチンの人びとは「家族」との関係を重視しており、「家族の重要度」に関する質問項目には、98%の回答者が「大変重要である」と回答した¹³⁾。

③ 「制度／機関／団体に対する低い信頼」

「制度／機関／団体に対する信頼」に関する質問項目に「とても信頼している」と「まあ信頼している」と回答した回答者のパーセンテージの合計は、全体的に低く、1984年から2001年まで、調査の回ごとに数値が低下した。特に「政府機関」(1984年：50%，2001年：5%)、「議会」(1984年：73%，2001年：7%)、「司法機関」(1984年：59%，2001年：12%)に対する信頼が低かった。

一方、対照的に、アルゼンチンの人びとはNGOに対する信頼は高く、2001年の調査では41%の回答者が「とても信頼している」と「まあ信頼している」と回答した。

④ 「政治への積極的関与」

アルゼンチンの人びとの政治への関心はやや低く、「政治への関心度」に関する質問項目に、「大変関心がある」、「まあ関心がある」と回答した回答者のパーセンテージの合計は、1984年は43%、1991年は30%、1999年は18%であった。

また、「友人と政治について議論する頻度」に関する質問項目に「全く議論しない」と回答した回答者のパーセンテージは、1984年の21%から1999年は49%に上昇している。

4. 東欧諸国

Broek and Moor (1994) による、EVS (1990年実施) の結果に基づく、東欧6カ国¹⁴⁾の人びとの価値観の諸相についての調査結果の読み取りは、以下のようにまとめられ

12) 本文には記載がないため、筆者がWVSのデータを確認した結果、1984年は74%、1991年は77%、2002年は83%の回答者が「非常に気をつける必要がある」と回答した。

13) ただし、筆者がWVSのデータを確認した結果、「大変重要である」と「まあ重要である」と回答した回答者の合計が98%であった。

14) チェコ、東ドイツ、ポーランド、スロヴァキア、ハンガリー、ブルガリア

る。

東欧諸国では、1990年より前のEVSのデータがなく、縦断（時系列）比較ができないため、本研究では、1990年の東欧諸国と西欧諸国の調査結果の比較により検討が行われた。

（1）「脱物質主義的価値観」

「今後10年間に最も重要な国家の目標」に関する質問項目——「秩序の維持」「人びとが政府の重要な決定に発言できる機会を増やすこと」「物価の上昇に対処すること」「発言の自由を守ること」——から作成された「物質主義的／脱物質主義的価値観」の測度の東欧諸国の平均値は2.13で、西欧諸国の平均値2.56より低い数値であった。

このような東欧諸国の人びとの「脱物質主義的価値観」は、これらの国々では物質的要因、経済的要因—経済的な安定が西欧諸国のように担保されなかったこと—と関連している。

また、40年以上におよぶ共産主義体制下で、産業化がほとんど国家主導で行われてきたため、中間層が形成されなかったことが、東欧諸国の人びとの価値観全般に影響している。さらに、これらの国々は共産主義体制以前も、長きにわたり権威主義的政治体制にあったという歴史的要因も関連している。

（2）その他の「自己表出的価値観」

東欧諸国では、「寛容性」を除いて、西欧諸国に比し高い数値と低い数値が混在する結果（mixed picture）が確認された。

① 「寛容性」

「隣人にしたくない人びと」に関する質問項目のうち、「異なる人種の人びと」「ムスリム」「移民／外国人労働者」「ユダヤ人」を挙げた回答者のパーセンテージを、東欧諸国と西欧諸国の平均で比較した結果、東欧諸国（それぞれ20.6%、22.7%、18.1%、16.3%）が西欧諸国（それぞれ9.4%、15.1%、11.3%、7.0%）より高い数値となった。

② 「制度／機関／団体に対する低い信頼」

「制度／機関／団体への信頼」に関する質問項目に「とても信頼している」「まあ信頼している」と回答した回答者のパーセンテージの合計を、東欧諸国と西欧諸国

の平均で比較した結果、「議会」については東欧諸国（48.9％）が西欧諸国（42.6％）より高い数値となった。一方、「報道機関」「警察」「司法機関」については、東欧諸国（それぞれ 38.3％、38.0％、47.2％）が西欧諸国（それぞれ 44.0％、71.2％、54.4％）より低い数値となった。

③ 「政治への積極的関与」

「政治の重要度」に関する質問項目に、「大変重要である」と回答した回答者のパーセンテージを、東欧諸国と西欧諸国の平均で比較した結果、東欧諸国（9.6％）が西欧諸国（12.0％）より低い数値となった。一方、「政治への関心度」の質問項目に「大変関心がある」と回答した回答者のパーセンテージ、「友人と政治について議論する頻度」の質問項目に「頻繁に議論する」と回答した回答者のパーセンテージは、東欧諸国（それぞれ 15.8％、29.8％）が西欧諸国（それぞれ 13.6％、15.0％）より高い数値となった。

5. トルコ

Esmer (2008) による、WVS（1990 年、1996 年、2000 年実施）、EVS（2001 年実施）の結果に基づく、トルコの人びとの価値観の諸相と、変化の軌跡についての調査結果の読み取りは、以下のようにまとめられる。

（1）「脱物質主義的価値観」

「今後 10 年間に最も重要な国家の目標」に関する質問項目を、1990 年と 2000 年で比較した結果、「経済発展の重視」を「最も重要である」と回答した回答者は 6％増加し、「安定した経済」を「最も重要である」と回答した回答者も 7％増加した。一方、「物価上昇に対処すること」を「最も重要である」と回答した回答者は 7％減少しており、「物質主義的／脱物質主義的価値観」に関して一貫した変化が見られなかった。

「脱物質主義的価値観」をはじめとするトルコの人びとの価値観に対して、「宗教性（religiosity）」が関連していると考えられる。トルコの人びとの「宗教性」は、実践（practice）、信仰（faith）の 2 つの測度で非常に高く、例えば 1990 年と 2000 年の WVS では、「神を信じますか」という質問項目に 98％の回答者が「はい」と回答した。

(2) その他の「自己表出的価値観」

全体的にみると、本研究が対象とした1990年代においては、トルコの人びとの価値観の有意な変化は起こらなかった。

① 「寛容性」

「隣人にしたくない人びと」に関する質問項目から、トルコの人びとの「寛容性」が全般的に低いことが確認された。また、その結果は1990年のWVSから2001年のEVSまでほとんど変化が見られなかった（たとえば、「異なる人種の人びと」を挙げた回答者は、1990年は39%、2000年は31%、2001年は34%、であった）。

例外的な変化として、「移民／外国人労働者」を挙げた回答者は1990年の32%から2001年の45%に増加した。一方、「AIDS感染者」を挙げた回答者は1990年の91%から2001年の81%に減少した。

また、「宗教性」が「寛容性」に与える影響を検討するため、「収入」「教育程度」「年齢」をコントロールして重回帰分析を行ったところ、「宗教性」は「寛容性」と有意な負の関係があることが確認された（標準回帰係数は -0.149 ）。

② 「他者に対する信頼」

「ほとんどの人びとは信用できるか？」という質問項目に関し、「信用できる」と答えた回答者は各調査で10%を下回っており、トルコの人びとの「他者に対する信頼」が極めて低いことが確認された。

IV. 各国・地域における実証研究から得られた示唆

筆者は、以上の5つの国・地域を対象とした調査結果の読み取りから、「寛容性」を含む人びとの価値観の変化に関し、以下のような示唆を得た。

1. 経済発展と「寛容性」の関係

西欧諸国、韓国における研究では、経済的発展にともない、一部例外はあるものの、人びとの「寛容性」「脱物質主義的価値観」「政治への積極的な関与」などの価値観の上昇が確認された。これは、「経済発展は、各社会を、その文化的伝統にかかわらず、共通の方向に導く」というInglehart (2000)の主張を支持するものであ

る。

この結果は、今後経済発展が見込まれる国々においても、西欧諸国、韓国と類似した価値観の変化が起こる可能性を示唆している。

2. 共産主義体制下の近代化と「寛容性」との関係

東欧諸国における研究では、「寛容性」「脱物質主義的価値観」などの例外はあるものの、全体的に見れば、東欧諸国と西欧諸国の人びとの価値観は、予想されていたよりも類似したものであることが確認された。

この結果は、Broek and Moor (1994) が指摘するように、共産主義体制下での国家主導による近代化は、結果として、「自己表出的価値観」へのシフトを導いたが、それは「寛容性」「脱物質主義的価値観」などの価値観の醸成にはつながらなかったことを示唆している。

3. 「脱物質主義的価値観」と「寛容性」の関係

韓国における研究では、「脱物質主義的価値観」を有する者については、1990 年期末の経済危機を経験しても、「寛容性」の上昇が確認された。

この結果は、一旦人びとの「脱物質主義的価値観」の上昇が起きると、一時的な経済的混乱のため「脱物質主義的価値観」の上昇が止まることがあっても、人びとの「寛容性」は後退しない可能性を示唆している。

4. 「宗教性」と「寛容性」との関係

トルコにおける研究では、人びとの「寛容性」は全体として低く、「宗教性」と負の相関関係があることが確認された。これは、カトリック、プロテスタントに関する先行研究でも確認された「宗教性」と「寛容性」の負の相関関係を支持するものである（例えば、福音派プロテスタントに関する Moore and Ovadia (2006)）。

この結果は、トルコのように、歴史的に西欧諸国との関係が深く、世俗的な憲法と複数政党の政治制度を採用し、人びとの民主主義への支持が高い国においても、高いレベルの「宗教性」は「寛容性」の醸成に負の影響を与える可能性をあらためて示唆している。

5. 「家族の重視」と「寛容性」の関係

アルゼンチンにおける研究では、「寛容性」、「NGO に対する高い信頼」などの「自己表出的価値観」とともに、「家族の重視」というこれまで「伝統的価値観」と

されてきた価値観が同時に確認された。

この結果は、Carballo（2008）が指摘するように、経済、政治の混乱にともなう労働環境と収入見通しの不安定化により、人びとの間で「安心し、リラックスできる『避難場所（shelter）』」として、「家族」に関する再評価（new appraisal）が起きている可能性を示唆している。

V. おわりに

1. 本研究では、「寛容性」に焦点を当てて、これまでの Inglehart および「ヨーロッパ価値観調査」の研究グループの研究のレビューを試みた。
2. 本研究で示唆された「脱物質主義的価値観」「宗教性」「家族の重視」などの「人びとの価値観の諸相」と「寛容性」の関係の構造は、今後に残された重要な課題の1つである。
3. Inglehart の2つの次元ではとらえきれていない文化的・宗教的・歴史的伝統と人びとの価値観との関係については、別の視点からの検討が必要と考えられ、これも今後に残された課題である。

【引用文献】

- Almond, G., and Verba, S. (1963), *The Civic Culture: Political Attitudes and Democracy in Five Nations* (Princeton: Princeton University Press); Finkel, Steven E, Lee Sigelman, and Stan Humphries (1999), “Democratic Values and Political Toleration”, in John P. Robinson, Phillip R. Shaver, and Lawrence Wrightsman eds., *Measures of Political Attitudes* (New York: Academic Press), 203-96.
- Auh, S (2008), ‘Value Change and Democratization in South Korea’, in T. Pettersson, Y. Esmer eds., *Changing Values, Persisting Cultures* (Leiden: Brill), 305-331.
- Broek, A and Heunks, F (1994), ‘Political Culture Patterns of Political Orientations and Behaviour’, in P. Ester, L. Halman and R. Moor eds., *The Individualizing Society* (Tilburg University Press), 67-96.
- Broek, A and Moor, R (1994), ‘Eastern Europe after 1989’, in P. Ester, L. Halman and R.

- Moor eds., *The Individualizing Society* (Tilburg University Press), 197-228.
- Carballo, M (2008), 'Cultural Trends in Argentina: 1983-2000', in T. Pettersson, Y. Esmer eds., *Changing Values, Persisting Cultures* (Leiden: Brill), 95-120.
- Esmer, Y (2008), 'Islam, Gender, Democracy and Values: The Case of Turkey, 1990-2001', T. Pettersson, Y. Esmer eds., *Changing Values, Persisting Cultures* (Leiden: Brill), 275-301.
- Inglehart, R (2000), "Culture and Democracy", in L. Harrison and S. Huntington eds., *Culture Matters: How Values Shape Human Progress* (New York: Basic Books), 80-97.
- 真鍋一史 (1999)「世論研究の系譜・現状・課題—政治・社会理論のフロンティア—」, 『三田社会学』第4号: 65-72 頁。
- Moore, L. M. and Ovadia, S. (2006), 'Accounting for Spatial Variation in Tolerance : The Effects of Education and Religion', *Social Forces* 84, no. 4 (June): 2205-22

The Aspects of Human Values and Their Trajectories of Change: A Review Focusing on
“Tolerance”

by HIDETARO CHOKKI

1. In the literature on political culture, “tolerance” has been said to be an essential element of a democratic political culture. In contemporary society, with people and goods moving across borders, tolerance is one of the most important themes for the development of democratic political culture.
2. Since the 1980s, researches on political culture have been actively conducted based on large-scale, cross-national surveys such as European Values Studies (EVS) and World Values Surveys (WVS). However, there have been few systematic reviews of these researches by focusing on tolerance.
3. Thus, this paper aims to examine aspects of human values including tolerance, and their trajectories of change in 5 pieces of research based on EVS and WVS.
4. Then, certain points regarding future research are presented.